

「物事の本質を見極め世界に羽ばたく」

ここに集われた3518名の学部卒業生のみなさん、2604名の大学院修了生のみなさん、そして専門職博士の学位を授与された90名のみなさん、本日はおめでとうございます。この卒業と修了の式にあたり、これまでみなさんが積み重ねてきた努力と研鑽とを、大阪大学を代表いたしまして心から讃えたいと思います。また、この日まで長きにわたってみなさんの勉学と研究を支えてこられたご家族の方々に心よりお祝い申し上げるとともに、深く敬意を表したく存じます。

皆さん、ご存知のように2007年に大阪外国語大学と大阪大学は統合を果たしました。大阪大学外国語学部生として初めてお迎えした皆様を本日、卒業生としてお送りできること、大阪大学総長といたしましては大変感慨深いものがあります。

その外国語学部卒業生はじめ皆さんは、本日晴れて学士や修士そして博士の学位を取得され、今後社会の様々な分野で、培った知識と経験に基づき活躍することが期待されています。一人一人が、それぞれの胸に思いを抱き、これから進むべき道に夢を膨らませておられることと思います。

私が皆さんに期待することがあります。それは、いかなる分野に進もうとも、「物事の本質を見極め世界に羽ばたいて欲しい」ということです。

昨年起きた日本にとって国難ともいえる東日本大震災やそれに続く原子力発電所の事故を契機にリーダー不在が浮き彫りにされました。ある新聞の世論調査で（注釈1）、理想的なリーダーとして、1位に坂本龍馬、2位に織田信長、3位に徳川家康と、いずれも歴史上の人物がトップ3を占めたことが報道されていました。坂本龍馬をあげた理由として「私欲が無い」や「将来あるべき姿を見据えていた」という回答が寄せられたそうです。また、リーダーの必要条件は、「決断力」、「責任感」、「先見性」、「交渉力」、「正義感」、「計画性」、「協調性」などが上位を占めていたそうです。

私は常日ごろ、リーダーの条件として、「志」、「理念」、そして「恕」の3つをあげています。リーダーたるものは、まずは志がなくてはなりません。高い志がなければ人は誰もついてきません。例えば、「会社を自動車産業の世界トップ企業に育てる」、「情報通信の革命を引き起こす」、あるいは、「高い効率を有する太陽光発電を開発する」や「癌の画期的な治療薬を開発する」など、様々な志を有する必要があると思います。そして、これらの志は高ければ高いほど人は魅力を感じ、その人について行こうとします。では、志が高ければそれでリーダーになれるかと言え、答えはノーです。理念が何であるかが重要です。何のために、どのような考えで、そのような志を抱くのか？それが重要です。ある人は、大金持ちになるために癌の治療薬を開発したいと思うかもしれません。またある人は、病気で苦しむ人を助けたいと考えるかもしれません。志は同じでも、理念が人々の共感を得なければ決してリーダーにはなれません。では、志が高く、理念が素晴らしければリーダーになれるのでしょうか？

私は、さらに「恕」の気持ちが大切であると考えます。「恕」は「如し」という字に「心」と書きます。すなわち、「そのまま」のものを自身が「心」で受け止めること。相手の立場を考えて、相手の気持ちに立ち、その人を許すというような、「大きな心を持ち、人を思いやる心」。この「恕」ということがリーダーとしては、大変重要だと考えています。

そして社会で責任ある立場に立つ人は「志」、「理念」、「恕」の3つに加えて、「物事の本質を見極める能力」を身につけることが重要だと思います。目の前の物事に的確に対応するためには、その出来事の裏に潜む、真の原因、なぜそのような問題が生じているのか、を見極める能力がなければなりません。例えば、ある電気製品の売れ行きが芳しくないとしみましょう。大幅に値引きをすれば一時的に売れ行きは向上するかもしれませんが。しかし物事の本質、すなわち真の原因が何かを見極め、それを根本的に解決しなければ、それは一時しのぎに終わります。その製品の性能が悪いのか？性能は素晴らしいけれどデザインが良くないのか？あるいはそもそもそのような製品を世の中の人は必要としていないのではないのか？その製品が売れない真の理由を見極めて、それを根本的に解決しなければ本当の解決とはいえません。また目の前の問題を解決したいと考えるあまりに全体像を見失うと、物事の本質を見失い、誤った方向に物事を導いてしまいます。よく、「木を見て森を見ず」と言われます。目の前の木だけを見て、その木にとって最も相応しい手入れをすれば、確かにその木は一時的には良く育ち、見栄えも良くなるかもしれませんが。しかし、その木のために最適な手入れをすることが、森全体にとってマイナス効果をもたらし、結局は森の一つであるその木にとっても不利益な結果をもたらすかもしれません。社会で責任ある立場に立つ皆さんは、常に目の前の問題を解決するだけでなく、俯瞰的な立場に立って物事の本質を見極める必要があるのです。

皆さんは、大阪大学で、授業や研究活動、あるいはクラブ活動や社会活動など様々な経験を積み、物事の本質が何かを見極める能力が備わっているはずです。いかなる出来事や問題の解決に立ち向かう時でも、常にその物事の本質は何か？という質問を自らに問いかけ、本質を明らかにすることにより問題の根本的な解決を目指して欲しいと思います。そして、いずれの分野に進もうとも、その分野のリーダーになって我が国の将来は勿論のこと、人類の発展と福祉の向上に貢献して欲しいと思います。大阪大学で学んだ皆さんには、リーダーとして、世界で活躍できる能力が備わっていると信じ、品格を持って進んでいただきたいと思います。なぜ私がそう信じているかを少しお話させていただきたいと思います。どのような組織や個人でも、その組織や個人の現在は、過去の歴史やその人の生い立ちに由来し、経験はDNAとして受け継がれており、未来を語る時には決してそれらを無視できません。皆さんは全員、「大阪大学で学んだ」という共通の歴史を有することになりました。大阪大学卒業生であるという意味で、社会から選ばれた人として見られ、選ばれた人間として社会に対する責任も有します。では、皆さんが学んだ大阪大学とは一体どのような大学でしょうか。本日、大阪大学を卒業されるにあたり、皆さんが学ばれ、皆さんの未来を形成する重要な一部になるであろう大阪大学を今一度考えてみたいと思います。

大阪大学は、「大学は『学問と教育の府である』、アカデミズムを追求することこそが、我々大学人に課せられた使命である」という理念のもと、「大阪大学を世界屈指の大学とす

るとともに、高い倫理観を有した優れたグローバル人材を育成する」という高い志をもって、22世紀にも輝き続ける大学であるため構成員全員の英知と力を合わせてさまざまな努力を積み重ねています。

昨年、大阪大学は創立80周年の節目の年を迎えました。「大阪にも帝国大学を」という地元大阪府民の熱意と、現在楠本賞という名前でも皆さんもご存知の、当時の大阪府立医科大学長の楠本長三郎先生や大阪府知事の柴田善三郎氏ら関係者の努力により、1931年、医学部と理学部の2学部からなる「大阪帝国大学」が、長岡半太郎初代総長の下、我が国第6番目の帝国大学として誕生しました。特筆すべきは、100%府民のお金だけで創設された帝国大学であるという点です。

江戸時代末期の1838年、緒方洪庵が「新知識をもって世の中の人を救う」ことを目的に私塾として設立した「適塾」の自由な学問的気風と先見性は、大阪府立医科大学を経て、医学部と理学部へと繋がります。1933年には大阪工業大学が工学部として加わりました。戦後、新たに法文学部が加わった際に、江戸時代後期、大坂町人が町人のために漢学や国学などを伝習した「懷徳堂」の蔵書類が、懷徳堂文庫として本学に寄贈され、大坂の町に息づいた独創的な学問と思想・文化を受け継ぐに至りました。新制大学としてスタートした際には、法文学部を文学部と法経学部へ改組し、現在の総合大学としての骨格が整いました。

このように、「適塾」を原点として、「懷徳堂」の精神を受け継ぎ、大阪府民の熱意に支えられた本学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、2004年の国立大学法人化、2007年の大阪外国語大学との統合を経ながら、我が国を代表する総合大学として、世界に向かってたゆみなく発展を遂げ、幾多の優れた研究者、教育者、文化人、そして政財界など各界の指導者や卓越した人材を世に輩出してきました。

大阪大学の原点でもある適塾について、もう少しお話しします。

外国語学部のルーツである大阪外国語学校出身の司馬遼太郎が小説『花神』の冒頭で以下のように述べています。

「適塾」という、昔大阪の北船場にあった蘭医学の私塾が、因縁からいえば国立大阪大学の前身ということになっている。宗教にとって教祖が必要であるように、私学にとってもすぐれた校祖があるほうが望ましいという説があるが、その点で言えば、大阪大学は政府がつくった大学ながら、私学だけがもちうる校祖を持っているという、いわば奇妙な因縁を背負っている。江戸期もおわりにちかいころ、大阪で、「過書町の先生」といわれた町の蘭方医緒方洪庵が、ここでいう校祖である。

適塾には青森県を除く全国から1000名以上の塾生が集まり、日夜勉学に励みました。その中には塾頭を務め、後に慶応義塾大学を創設した福沢諭吉、諭吉の後に塾頭を務め、我が国の医療制度、公衆衛生制度の基礎を築いた長与専斎、開国の必要性という先見性を持ちながら、安政の大獄で25歳の若い命を落とした橋本左内、日本赤十字社の前身の博愛社を創設した佐野常民、明治政府で近代的な軍隊制度を創った大村益次郎、外交で列強各国と対峙し活躍した大鳥圭介、さらには1810年に設立された東京大学医学部の初代総理を務め

た池田謙斎など、様々な分野でリーダーとして活躍した人々が適塾で育ちました。適塾が明治初期における我が国の近代化に大きな役割を果たしたといえます。

さらに、福沢諭吉の「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉はあまりにも有名ですが、彼の言葉で私の好きな言葉があります。

適適豈唯風月のみならんや 渺茫たる塵界自ら天真 世情説くを休めよ意の如く
ならずと無意の人は乃ち如意の人

つまり、適々とは、「花鳥風月を愛でる『自適』の境地を言うだけでなく、俗世でさえ己の心に適う生き方をする事。この世は思い通りにならないなどと言うな。何事にも無心で真摯に取り組めば、道は必ず自ずと開ける」というような意味です。私は特に「無意の人は乃ち如意の人」の下りが好きです。そのような学問的気風が大阪大学の根底にあるのです。

適塾の創始者である緒方洪庵は、12条からなる「扶氏医戒之略（ふしいかいのりゃく）」をまとめています。扶氏とは、ドイツの医師：フーフェランド（C. W. Hufeland、1764-1836）のことです。その著「Enchiridion Medicum:医学必携」のオランダ訳書をまとめ、「医者とはなにか」について、自分自身と門人への戒めとしました。その第一条には、このように書かれています。

人の為に生活して、己のために生活せざるを医業の本體とす。安逸を思はず、名利を顧みず、唯おのれをすてて人を救はんことを希ふべし。人の生命を保全し、人の疾病を復治し、人の患苦を寛解するの外他事あるものにあらず。

つまり、「医者がこの世で生活しているのは、人のためであって自分のためではない。決して楽をしようとするな。名声を求めるな。ただただ自分を捨てよ。人の命を守り、人の苦しみを理解できる人間になれ」ということです。また第二条には、

病者に対しては唯病者を視るべし。貴賤貧富を顧みる事なかれ。一握の黄金を以て貧士双眼の感涙に比するに何ものぞ深く之を思うべし

とも書かれています。言うまでもありませんが、「物事の本質を見極める」そのものを伝えているのではないのでしょうか。

これらは医者たる者に向けられた言葉ですが、どの分野に歩む人にも当てはまる教訓です。

皆様が学び、本日卒業する大阪大学は、原点である適塾の自由闊達な気風と「人のため、世のため、国のため、道のため」という精神、大坂町人の学問への情熱、そして大阪府民の大阪にも帝国大学を創ろうという熱意が脈々と受け継がれているのです。そのことを誇りに思ってください、「大阪大学で学んだ」ということを、皆様のこれからの礎としていただきたいのです。

今、日本は危機を迎えています。現実とは思えない悪夢から1年が経っても、なお多くの地域で復興の目処が立たずにいます。この危機を乗り越え、日本が再び明るい未来を切り拓

くことができるか否かは、若い皆さん一人一人の双肩にかかっています。社会が皆さんに求めているところは、様々な分野で責任あるリーダーとして社会に対する責務を果たすことです。あるいは、大阪大学で養われた知的創造活動としての基礎研究や応用研究から学んだ探求心の更なる推進です。このようなことは本学で研鑽を積み重ねた皆さんだからこそ成しうることです。

皆さんは、企業や行政機関など第一線で活躍する社会人として、あるいは各種教育研究機関で次世代の人材を育成する教育者として、あるいは未来を切り開く研究者として、そして一人の人間として、長い人生を送られるわけですが、今日の感激を忘れることなく、一瞬一瞬を大事にして、大阪大学の卒業生であるという誇りと自信を持って、未来に向かって飛躍していただきたいと思います。そして大阪大学はいつでも皆さんを応援しています。ホームカミングデイには是非とも笑顔を見せにキャンパスを訪れてください。

皆さんにあり、私に無いもの、それは未来という無限の可能性です。物事の本質を見極め世界に羽ばたいてください。

最後になりましたが、皆さんお一人お一人がこれからの長い生涯、健康で幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたしの式辞といたします。

本日はご卒業おめでとうございます。

平成24年3月22日
大阪大学総長 平野俊夫

注釈1：産経新聞平成24年1月1日朝刊